

学 位 論 文 要 旨

氏 名 中植 正剛

題 目 国際的なデジタル・メディア活用コンピテンシーの枠組みに基づく高等学校における情報活用能力育成のあり方に関する実証的研究

本研究の目的は、国際的な枠組みによって提案されているデジタル技術や情報メディアの活用能力に関するコンピテンシー（以下、デジタル・メディア活用コンピテンシー）の概念を用いて、我が国の情報活用能力の概念や要素を捉え直し、生涯学習の観点から、その育成のあり方について高等学校を中心に検討することである。

本論文は、緒論と結論を含め全10章で構成される。第1章では、背景を踏まえ、学校教育を超えた観点からの情報活用能力の検討に関する先行研究、自己調整学習を取り入れた情報活用能力育成の実践に関する先行研究等のレビューを行い、研究課題として、(1)海外のデジタル・メディア活用コンピテンシーの枠組みとして欧州委員会のDigCompとユネスコのメディア情報リテラシー（以下MIL）を取り上げ、コンピテンシーの観点からそれらの概念と要素の整理を行う（研究課題1）、(2) DigCompとMILの枠組みを用いて我が国の情報活用能力の特徴や強み・弱み、過不足についての検討を行う（研究課題2）、(3)デジタル・メディア活用コンピテンシーの自己調整学習のための自己評価ツールとしてDigCompとMILに準じた自己評価尺度の開発を行う（研究課題3）、(4) 開発した尺度を用いて自己調整学習を取り入れた実践授業を行う（研究課題4）の4点を設定した。

研究課題1～3は、第2～4章（DigComp）及び第5～7章（MIL）の各章に対応し、研究課題4は第8章、第9章に対応し、結論を第10章にまとめた。

第2章では、研究課題1に対応して、DigCompのコンピテンシー概念の整理を行った。その結果、DigCompは、民主的かつ多様性に富んだ公正な社会を築く能力を持つ、自立した市民の育成という社会文化的な理念が基盤にあること、概念参照モデルとして5領域21のコンピテンシーが階層的に示されていること、課題の複雑さ、自立性、学習目標分類の3つの基準によって習熟度レベルが示されていることなどが明らかになった。

第3章では、研究課題2に対応して、DigCompと情報活用能力を比較検討した。その結果、情報活用能力は、情報技術の活用に制約されず、問題解決的な認知活動全般を扱っているため、教育課程編成との親和性が高いが、情報技術の活用を伴ったデジタルコンピテンシーの段階的な育成や保証が行われない可能性があること、デジタル技術や情報メディアの自立的な活用や自立的な学習の視点が弱いこと、他者との協働、メディア・リテラシー、シティズンシップが弱いことなどが明らかになった。

第4章では、研究課題3に対応して、日本の高校生を対象にDigCompに準拠した自己評価

尺度の開発を行った。その結果、開発した5領域20項目の自己評価尺度について、bifactorモデルの適合の良さが見られ、構成概念妥当性、内的整合性、基準関連妥当性が確認された。

第5章では、研究課題1に対応して、MILを取り上げ、コンピテンシー概念の整理を行い、考察を加えた。その結果、MILにはメディア・リテラシーの特徴が強く表れており、民主主義社会の担い手としての情報に対する批判的な立場を持つ市民を育成する思想を反映していること、MILコンポーネント、MIL主題、MILコンピテンシー、パフォーマンス規準、習熟度レベルの5つの階層構造で構成されていることなどが明らかになった。

第6章では、研究課題2に対応して、MILと情報活用能力を比較検討した。その結果、民主主義社会におけるエンパワーメントの観点から批判的思考力を身に付けることや、メディアや情報提供者に関わる内容といった、メディア・リテラシーに関連する要素が情報活用能力には見られないこと、情報活用能力にはない中間層の枠組みがあることが明らかになった。一方で、プログラミング的思考や統計等に関する資質・能力が、MILにはみられない情報活用能力の特徴であることなどが明らかになった。

第7章では、研究課題3に対応して、日本の高校生を対象としてMILに準拠した自己評価尺度の開発を行った。その結果、1.1～3.4のMIL主題に配分された43項目は、MILの総合的な概念を2次因子、MIL主題1.1～3.4の下位領域を1次因子とする、2次因子モデルに対する適合がよいことが確認された。

第8章では、研究課題4に対応して、高校生を対象とした授業実践に向け、DigCompとMILに関する高校生の能力感の構造モデルを構築し、効果的な授業実践のための指導上の仮説を導き出した。その結果、7因子25項目の因子が抽出され、共分散構造分析を用いたそれらの因果関係から、情報の影響と法令・ルール系、情報の多面的・吟味的評価系、デジタルスキル系の3つのコースを設定することが、生徒にとって一貫性を感じられる学習になるのではないかという、指導上の仮説を得た。

第9章では、研究課題4に対応して、第8章で示された能力感構造と自己調整学習を取り入れた教育実践を試行的に行い、高校生のデジタル・メディア活用コンピテンシー育成のあり方を検討した。実践の結果、生徒は、デジタル・メディア活用コンピテンシーの学習方略を獲得し、学習を継続する価値を認めた。学習の際、学習内容に特化した学習方略やその適用例を提示すること、汎用的な学習方略をわかりやすく提示することが、学習継続価値への認識の高まりに影響することが明らかとなった。学習方略については、認知的方略の領域の批判的思考、リソース管理の領域の情報収集・リサーチ、AIの活用、他者との協働、メタ認知的方略の領域の問題解決過程が学ばれたことが示唆された。リソース管理の方略は、問題解決過程の学びと関連付けながら学ばれた。

第10章では、第2章から第9章で得られた知見を整理するとともに、今後の実践の方向性と課題を展望した。教育実践への示唆として、情報社会における市民性の涵養に向けた生涯学習の観点を踏まえ、情報活用能力の新たな枠組み及び内容とその育成方法を提案した。